

命のち



いのち【命】

- ❶ 生物の生きてゆく原動力。生命力。
- ❷ 寿命。
- ❸ 一生。生涯。
- ❹ もっと大切なもの。命ほどに大切に思うもの。真髓。
(広辞苑)

「命を預けます」～園児との交流～

東部高校



(信濃毎日新聞社提供)

東部高校では、平成16年度の2年生からコース制を導入した。スポーツコースと福祉コースでは、今までに授業の一環として近隣の幼稚園や保育園の園児、子育て支援センターでの乳幼児との1対1の交流を年間通じて実施している。これからは、高齢者との交流など、さらに発展した活動になる予定である。「異年齢との交流を長期的に続けることで、世代の壁を超えて人の気持ちを学び、役立ち感を感じてほしい」（校長）とのねらいがある。園児たちのかわいらしい笑顔や元気な声に、緊張気味だった生徒たちの表情も緩み、子どもたちに温かいまなざしを向ける姿がみられる。「生徒は、校内での学習以上に意欲的です。」と教師は話す。

「命を預けます」初めて言われた高校生

園長先生は、深々と頭を下げながら「子どもの命を預けますので、お願いします。」と挨拶された。子どもを預かる経験などが無い生徒は、「命を預かる」という言葉にハッとしながらも、その重みを深く受け止めた。生徒は、園児が水に入るのを注意深く見守り、水への慣れ具合を読みとっていた。浮き輪を使ってしか泳げない園児や水を怖がる園児には、生徒が寄り添い、手をしっかり握りながら、ゆっくり引っぱり出した。園児は生徒の背中に乗ったり顔をついたり、お兄さんお姉さんが大好きだ。園児や生徒から自然に笑顔や笑い声が起こり、楽しい時間が過ぎていく。生徒たちの園児に向けた温かい眼差しが印象的であった。



「お兄ちゃん、まだ離さないでよ」

運動会が間近に迫った保育園では、園児が運動会で発表する竹馬や一輪車を、生徒が手助けしながら教えた。「竹馬に乗ればお兄ちゃんより高くなれる・・・。」と、すぐに乗れる子もいれば、「お兄ちゃん、まだ離さないでよ。」と、怖がる子もいる。するとそういう子には「大丈夫、出来るよ。」「うまい。」と励ましている。そして、竹馬に乗れるようになったことを共に喜び合っていた。「人の役に立つ実感を得る機会になれば。」と教師は話す。



命と向き合う現場から

中学校保健室の一場面

「自分なんて生まれてこなきゃよかったのに」と思う生徒

生まれた時からずっと、母親と二人で生活してきた。友だちに対しては面倒見もよく、楽しい子だが、独占欲が強く、何でも自分の思い通りにしようとするため、友だちが徐々に離れていく。「自分は悪くない、友達が無視する。」と訴える生徒に「相手のことも考えてみようよ。」と話すと、「どうせ私が全部悪くなればいいんでしょ。自分なんか生まれてこなきゃよかったんだ。死にたい。」と自己を否定する。自分のことに精一杯で相手のことまで理解しようとする心の余裕はない。まず養護教諭が生徒をまるごと受け入れることから始まる。

リストカットを繰り返した生徒

教科担任から指示されたことが出来ず、教室で手首を傷つけ、保健室に来た。手先まで血が流れるほど傷は深いところもあった。家や学校で頻繁にリストカットを繰り返しており、両手首とも傷だらけで、保健室でも度々治療をしている生徒であった。「痛かったですよ。」と手をさすりながら手当てをすると、「ぜんぜん、楽しいよ。」と涼しげな表情で答えたが、その言葉とは裏腹の痛々しい叫びのような気持ちが伝わってきた。ある時、この生徒が突然「帰る。」と出ていった。「ちょっと待って、何かあったの？」と追いかけて、家までついていった。家の中に入った生徒に「ゆっくり休んでね。」とそっと声をかけ家を後にした。気になって振り返ると、生徒が玄関先で小さく手を振っていた。思わず大きく手を振り返した。今では、自分のことを語り始め、時々明るい表情を見せてくれるようになった。様々な自己表現にとことんかかわり命に触れたいと思う。

有明高原寮

フェンスも格子もない開放的な少年院

開放的な塀のない短期少年院として知られている穂高町の有明高原寮。少年院は、家庭裁判所の審判を受け、保護処分として少年院送致となった少年を收容し、生活指導・職業指導・教科教育を中心とした教育・訓練を行い、社会生活に適應できる健全な少年に育成することを目的とした法務省の施設である。少年たちは、問題性に応じた個別的教育計画に基づき、様々な活動に真剣に取り組んでいる。また、今までそばに居ることが当たり前であった家族と離れ、改めてその大切さに気づく。

〈一日の生活〉

6:30 起床ランニング	16:30 終礼・清掃
7:30 朝食	17:00 夕食集会
9:00 朝礼	19:30 テレビ
教育活動	自己計画学習
12:00 昼食休憩	20:30 内省・日記
13:00 教育活動	21:30 就寝

握手
 面会に来てくれた父さん母さんと
 生まれて初めて別れの握手をした
 父さんの手は冷たく 母さんの
 手は震えていた
 父さんの涙を初めて見た
 反発ばかりしていた母さんに
 「頑張るよ」と素直に言えた
 何かが変わったと思った
 渡り廊下で空を見ると 青空に
 白い雲が浮かんでいた
 涙がとまらなくなった
 父さん 母さん ごめんさい
 (S・1生)

向き合う・誉める・叱る

『有明高原寮には、「自分なんかだめだ。」「どうせうまくなんかいかない。」など自分に自信がなく、自尊感情の低い少年たちが多い。そのため、自分が起こした事件や弱い自分、失敗した自分と向き合うことが余計に難しい。少年院では、本当に頑張ったことを誉められたり、時には厳しく叱られたりしながら、感動体験や成功体験を積み重ねる中で、「人から必要とされている自分」「人に受け入れられている自分」「やればできる自分」を実感する。

そして、少しずつ自分自身や現実と正面から向き合えるようになると、自分から目標に向けて頑張ろうと考えたり、前向きに生きていこうとする力がついたりするのではないかと思う。』

(有明高原寮 寮長 茅原良一)



『命もいつかはなくなる』

「命」の詩を書いた宮越由貴奈さんは5歳のとき「神経芽細胞腫」と診断され、平成9年の6月に11歳で亡くなった。

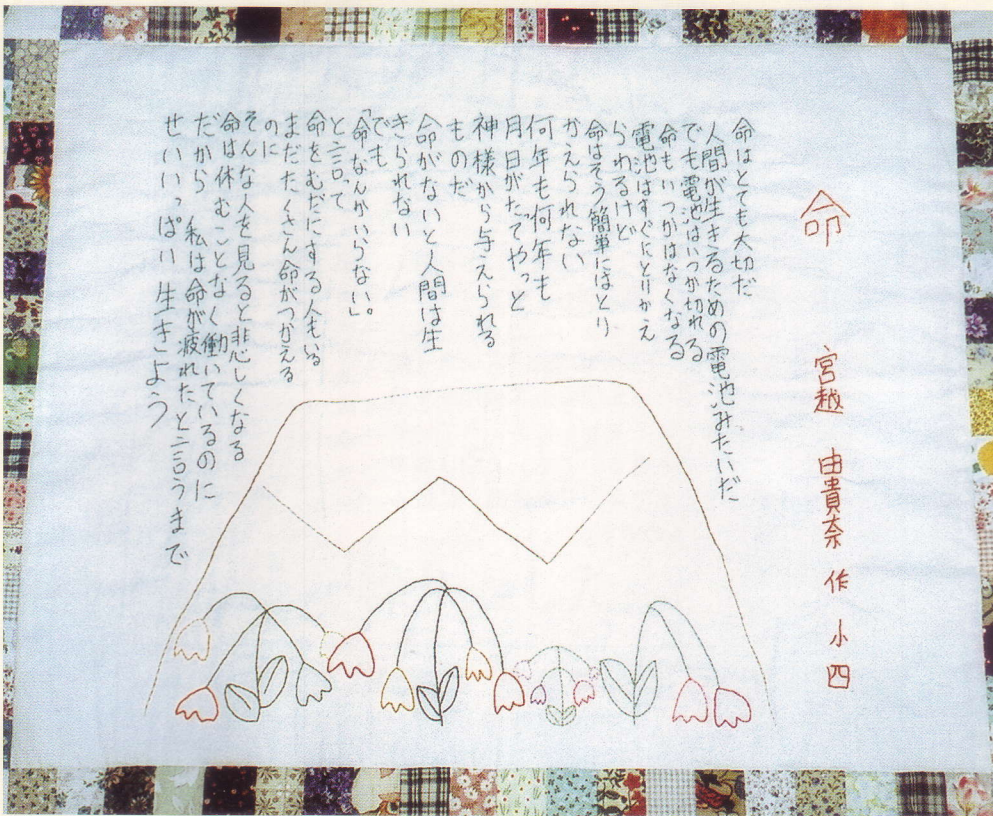
この詩は亡くなる4ヶ月前に書かれたものである。

県立こども病院



由貴奈さんのお母さんは語る。

「由貴奈は5年半の間、入退院を繰り返して、何度にもわたる手術や苦しい治療を受けました。いじめや自殺などのニュースが連日流れる中、病院では一緒に入院していた友達が何人か亡くなっていくのです。生きたくても生きられない友達がいるのに自殺なんて…そんな感じでした。」



命

宮越

由貴奈 作 小四

命はとて大切だ
人間が生きるための電池みせいだ
でも電池はいつか切れる
命もいつかはなくなる
電池はすぐにとりかえ
られるけど
命はそう簡単にはとり
かえられない
何年も何年も
月日がたてわたると
神様から与えられる
ものだと人間は生
命がなると人間は生
きられない
でも
命なんかいろいろない
と三つて
命をむだにする人もある
まだたくさん命がつかえる
のに
そんな人を見ると非心しくなる
命は休むことなく働いているのに
だから私は命が疲れたと三つうまで
せいでいっぱい生きよう

「この詩を書いたころ、ちょうど院内学級で電池の勉強をしたばかりだったそうです。でも、由貴奈がなぜこの詩を書いたのか、本当の理由はわかりません。自分の死を覚悟していたのかもしれませんが、怖くて聞けませんでした。確実にいえることは、この詩に書いた通り由貴奈は十分精一杯生きたということです。」

多くの人たちの心に生き続ける

命の授業

今も、親の命と向き合って

由貴奈さんのお母さん陽子さんは現在、しばしば講演会で、由貴奈さんと共に病氣と闘った日々を語っている。子どもの死を通して、自分たちが親として成長したこと、家族の絆が深まっていったこと、そして当たり前、普通に毎日が過ごせることがどんなに幸せなことであるかを切々と訴える。

「由貴奈の命は11年という短いものでしたが、私たちを『親』にしてくれた、とても大きな大切な命なのです。」

由貴奈さんの命は今もなお、親の命と向き合い、多くを語りかけている。

命に限りがあることを知ってはいるが、意識しないで生きている子どもたち…。そんな子どもたちが「命」の詩と出会った。その詩の作者由貴奈さんが長い闘病生活の後、11歳でこの世を去ったこと、そして「ゆきなちゃん」の詩からもわかるように、いつでも周りの子のことを考えているやさしい子であったことを知り、こんな感想を残した。

(S小学校5年生)

私は時々、私なんかいなくてもいいんだと思ったときがあったけど、今日勉強して、おこってもけんかしても一人一人が生きている、それだけではないことなんだと気が付きました。(女子)

勉強とかはつらいけど、生きられることに感謝して、命を最後まで使いきりたい。(男子)

私は、命なんかいらなんて思ったことはないけれど、自分が死んでも誰も悲しまないだろうと思ったことは何度もあります。そんな自分を見直して、命を大切にしていきたいです。(女子)

～由貴奈さんのいのちから学ぶこと～

習字や図工の作品が貼られた壁。ぐるりと円状に並ぶ大小の机と椅子。よくある学校の風景のように見える。ここは県立こども病院の院内学級。創設当時から関わってきた山本厚男先生は子どもたちがやって来るのをやさしい笑顔で待っていた。「先生、お手紙届けにきたよ。」と1年生の男の子。「お、ありがとう。調子はどうだい。」「今日は勉強しないよ。」という女の子に、「そうかい。」と声を掛ける。「先生、この問題教えて」と点滴台を押しながらやってくる女の子もおどろくほど明るい表情だ。どの子も樂觀できない病気を抱え、入院生活を送りながら院内学級に通っている。

ゆきなちゃん

田村由香（小学五年）

ゆきなちゃんは
合計二年間も病院にいる
治療で苦しいときもある
それなのに
人が泣いているときは
自分のことなんか忘れて
すぐなぐさめてくれる
でも たまあに
夜 静かに泣いていたときもあった
いつもなぐさめていた
ゆきなちゃんが泣くと
こっちがどうしていいか
わからなくなる
ゆきなちゃんの泣いている姿を
ただじっと見ているだけで
ごめんね なぐさめられなくて
ゆきなちゃん ごめんね

山本先生は語る。

「10歳以上の子どもには、告知がなされてインフォームドコンセントが行われる中で治療が進みます。与えられた命の限りを知った子どもたちは、同じ思いの仲間を支えられながら人生の仕切り直しを始めるのです。」「由貴奈さんは自分の病状が重いことを知りながら、懸命に勉強をしたり治療を受けたりしました。そして『ゆきなちゃん』の詩からも分かるように、いつでも友だちや家族のことを考えているようなやさしい女の子でした。その姿は、お父さんやお母さん、院内学級の多くの友だち、そして私の中に生きています。『命』の詩が多くの皆さんの心を打つのは、由貴奈さんの生きざまが素晴らしかったからでしょう。」



由貴奈さんの命のメッセージ

命のタペストリー

左ページの写真は、由貴奈さんの筆跡を刺繍したものです。

T小学校6年生の子どもたちが「命」の詩を読み合った。詩に触れたとき、クラスの中に静寂が生まれ、涙を見せる子もいた。自分たちに命の大切さを教えてくれた由貴奈さんに、この詩を織り込んだ刺繍をプレゼントしたいと考えた子どもたち。その作業を通して、クラスの中には一体感が生まれ、それまでクラス内にあった子どもたち同士のわだかまりもいつしか消えていった。その刺繍は同じ病室で過ごした子のお母さんの手によってタペストリーとなり、今、由貴奈さんのそばにある。

命の合唱曲

松本第一高校音楽部顧問の古原さよ子先生は、古くから宮越家と親交があった。先生はこの詩と出会ったとき深く感動し、詩に曲をつけた。その曲は合唱曲として音楽部で歌われることになった。そして、この合唱曲は大きな反響を呼び、CDとなった。偶然にも松本第一高校音楽部には、由貴奈さんと共に院内学級で勉強をしたあすかさんがいた。あすかさんは今、こう語っている。「暗くなりがちな入院生活が楽しくなったのは由貴奈ちゃんが存在が大きかったからです。由貴奈ちゃんがこの詩に託した思いをかみしめながら、心を込めて歌います。そしてこの思いが世界中に広がることを祈ります。由貴奈ちゃん、ありがとう。」



「命」をささえる ～やさしいところを取り戻せる本たち～

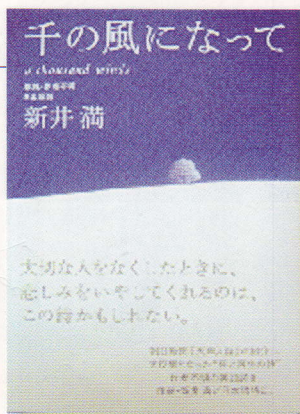


「一等賞の旗」障害を見つめる十七歳 成沢未来 著 里文出版

「周囲の心配が先行する中、同情を寄せる目もあれば、冷たい好奇の目もある。宇宙人のようにピョコ、ピョコ動作する自分が滑稽に見えるのか。心配しなくてもいいんだよ。僕はこの動作ひとつひとつにしても個性にするから。そしてさまざまな目をすべて原稿用紙の中に描き、僕にしか書けない作品とするから。」（本書から）小布施町出身で、現在須坂東高校3年生の成沢未来君は、障害を客観的に見つめ、生きることの大変さとすばらしさを自らの体験を基に語っています。

「無言館」ものがたり 窪島誠一郎 著 講談社

絵筆を置いて戦争に、そして帰ってこなかった学生たち。上田市の塩田平にある「無言館」には、約50年前に起こったあの太平洋戦争で亡くなった学生たちの作品や遺品が集められています。「無言館」の絵は、「絵を描くよろこび」にあふれていると言われています。それは人間の「生きるよろこび」でもあるのです。人間は誰でもその「生きるよろこび」を持って生まれてきているはずです。「無言館」に並んでいる学生たちの絵は、静かにそのことを語りかけているのです。



「千の風になって」新井満 著 講談社

「大切な人をなくしたときに、悲しみをいやしてくれるのは、この詩かもしれない。」朝日新聞「天声人語」に紹介され、大反響を巻き起こした”死と再生の詩”。作者不詳の原詩は英語詩です。

『私のお墓の前で 泣かないでください そこには私はいません 眠ってなんかいません 千の風に 千の風になって あの大きな空を 吹きわたっています』

「輝け！いのちの授業」大瀬敏明 著 小学館

この「いのちの授業」は、ガンで平成16年1月に亡くなった茅ヶ崎市立浜之郷小学校大瀬敏明校長の魂の絶唱です。「教師の“伝えたいもの”が強くあるとき、子どもの内面に何かの変化がおき、本当に大事なものとなって心にしまい込まれていくのではないだろうか。」いのちの授業実践を通して、大瀬校長は感想をこう述べています。豊かさや便利さの陰で、命のつながりや重みを軽視する現代社会に「大切なもの」を取り戻す授業を“いのち”をかけて提言しています。「どれくらい自らの命について向き合っていますか。」



「盲導犬クイールの一生」石黒謙吾 著 秋元良平 写真 文藝春秋

「人間らしい歩き方を思い出させてくれた。」この言葉を残して、ラブラドルの盲導犬クイールのパートナーはこの世を去りました。クイールは、多くの人と関わることで、優しさやいたわる気持ち、信じることを教えてくれます。生まれた瞬間から息を引き取るまでを、モノクロームの優しい写真と文章でつづる、盲導犬クイールの生涯、感動の記録です。優しい語りかけは、人の心のピュアな部分に触れ、何かを感じさせてくれます。きっと涙が止まらなくなるでしょう。



自分の“いのち”のネットワークマップをつくってみよう

ワークIについて

普段何気なく日常生活を送っている子どもたちが、自分の“いのち”のつながりを考えることで、自分はいろいろな人・もの・ことと関わって生きていることを感じ、その自分の“いのち”を認めたり、友だち・家族の“いのち”についても感じられたりするきっかけとなることをねらいとします。

方法

① 真ん中に自分をかきます。
(名前・似顔絵・キャラクターの絵・マーク等)

② 自分の周りを思い浮かべて、思いつくままにかきます。

記入のポイント *イメージをふくらませてみましょう。より具体的なものをかきます。

自分の“いのち”にとって

[必要な・育ててくれる・励ましてくれる・安心できる・元気になる・楽しめる]

自分の“いのち”が

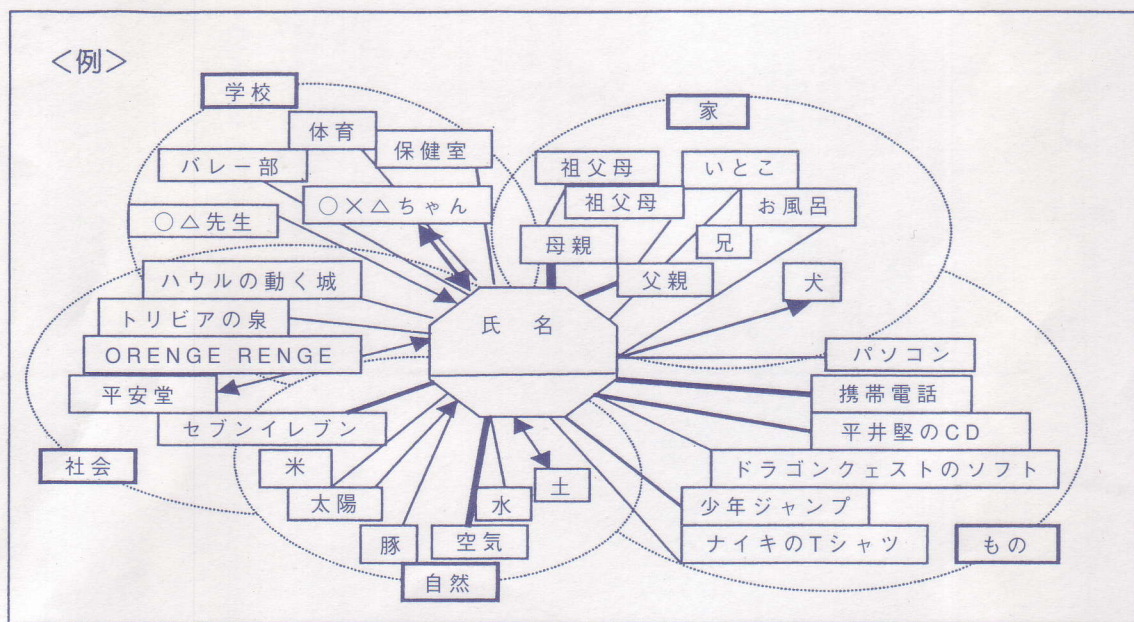
[必要となる・影響を与えている・支えている・助けている・楽しませている]

*つながりの深いものほど線の太さを濃くします。

ひと・もの・

こと・場所は?

③ できあがったマップをみて、自分の“いのち”のネットワークマップについて感想を書きます。



活用例

- ① 「過去の自分」、「今の自分」のマップをそれぞれ作成し、変化したところ・同じところについて考えてみましょう。
- ② 一番深いつながりのもの・それを選んだ理由を発表しあい、友だちとの共通点や相違点を共有しましょう。
- ③ 個人のマップと友だちのマップの同じ事柄を線でつなげたり、貼り合わせたりしていき、クラス全体のマップを作り上げてみましょう。



自分史をつくってみよう

ワークIIについて

「自分史をつくる」時には、たくさんの出来事の中から自分にとって意味があることを選びます。それはその人の思いや考えがよく表れていると考えられます。自分の人生について一度は立ち止まって足跡を振り返り、「過去」や「現在」の自分の存在を確かにします。そして、未来の自分を想像し、かけがえのない自分だけの人生を「今、生きている」ことが実感できることをねらいとします。

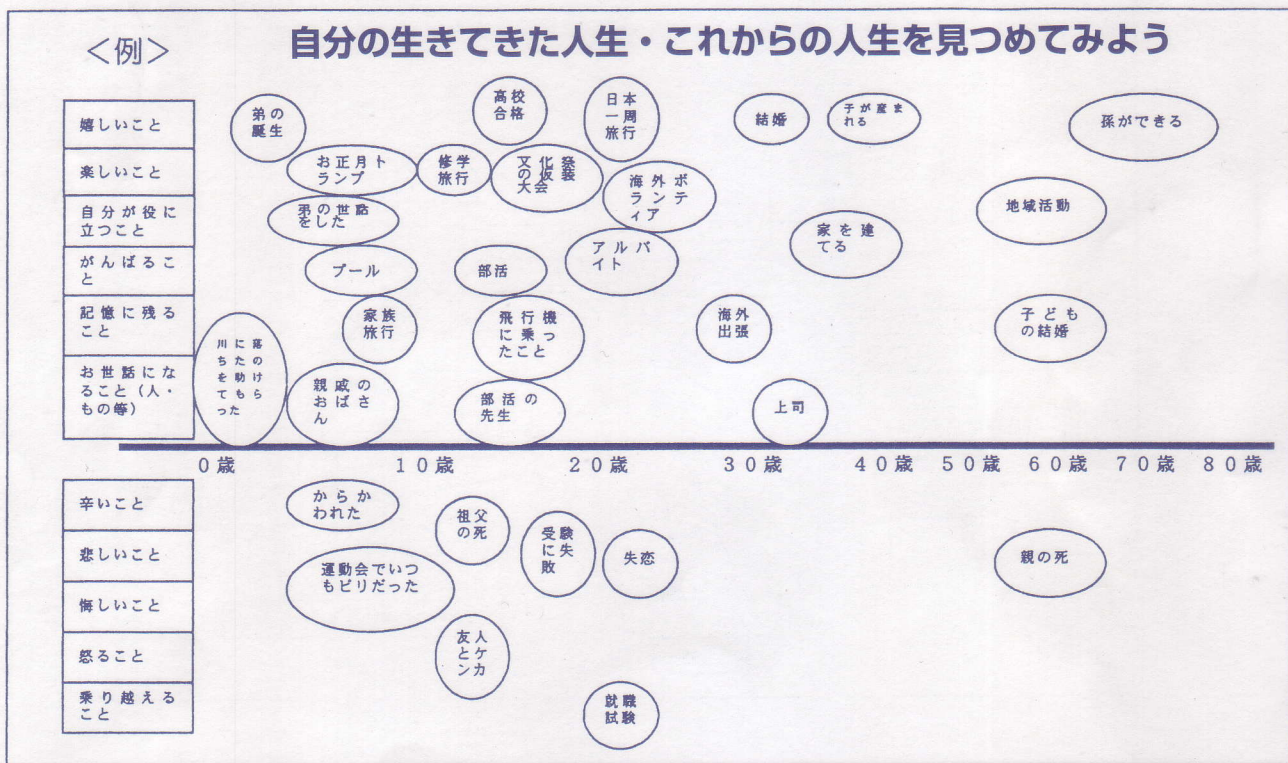
方法

- ① 真中に線をひいて0歳から80歳まで目盛りをふります。
- ② 一つずつ質問をしながら思い浮かぶことを書き入れます。

記入のポイント *0歳から5年ごと思い出してみましょう。

嬉しかったこと・楽しかったこと・大好きだったこと(人)・記憶に残っていること(人)・自分が役に立ったこと・お世話になったこと(人)・がんばったこと・悔しかったこと・怒ったこと・悲しかったこと・辛かったこと等

- ③ 現在の年齢にたどり着いたら10年後、20年後等、未来の自分を思い浮かべ、どんな出来事があるか自由に想像して書きます。
- ④ できあがった自分史を眺め、感想を書きます。



活用例

- ① 幸せ度曲線を描きます。線を中心に上にいくほど幸せ度が高いことを示します。過去から現在だけでなく将来についても予想してみます。
- ② グループの中で将来の出来事について同じ内容、感心した内容等について気づいたこと・発見したことを話し合います。
- ③ クラスの中で将来の夢について語り合います。